

子どもの日誌的観察と質的研究

麻生 武 (奈良女子大学大学院 人間文化研究科教授)

自然史としての子どもの日誌的観察

自然史として子どもを観察したのは、おそらくチャールズ・ダーウィン (C.Darwin) が最初である。彼は、自分の子どもが生まれる前から認識の起源をさぐる手段として赤ん坊に関心を寄せ、息子が誕生してからは、科学的フィールドノートをとると同じ精神で観察を行っている (Wallance, Franklin, & Keegan, 1994)。ダーウィンは 1877 年にその記録の一部を「マインド誌」に発表している。ヒトの由来を明らかにするために子どもを観察するという視点が生まれたのは、ダーウィンのおかげであると言えよう。発達心理学はその精神を直接引き継ぐことで誕生したのである (麻生 2007)。

1882 年には、ドイツにおいて、乳児の系統的科学的観察方法の確立に多大な影響を与えたプライヤー (Preyer, 1882/1888-89) の労作「子どもの精神」が発表されている。アメリカにおいても、発達心理学の主幹となる科学的乳児日誌は、1890 年半ばまでに生み出されている。その立役者は、英語圏における初期の発達心理学の三巨頭、ホール (G.S.Hall [1844-1924])、サリー (J.Sully [主著 1896])、ボールドウィン (J.M.Baldwin [1861-1934]) の 3 人である。彼らは、いずれも子どもの日誌的記録に基づいて発達心理学的研究を行ったのである。

20 世紀の最初の数十年間に、アメリカにおいて行動主義革命が生じた。行動主義や客観主義的心理学の出現とともに、科学的であるためには実験室状況で集めたデータを量的な方法で統計的に分析する必要があるとされるようになったのである。その結果、家庭で一人の観察者が自分の子どもを観察することによって得られた日誌的観察データは、信頼できる科学的データとはみなされなくなってしまった。それと同時に、発達心理学にグラント・セオリーを提供してきたスタンレー・ホール (G.S. Hal) やボールドウィン (J.M.Baldwin) の考えは次第に省みられなくなってしまった (Wallance et al., 1994)。子どもの日誌的観察を重視する立場が力を失ったのである。

それに対し、ヨーロッパでは少し事情が違っている。ワランスら (Wallance et al., 1994) によると、コフカ (K.Koffka [1886-1941]) のみならず、ビューラー (K.Buhler [1879-1963])、シュテルン (W.Stern [1871-1938])、ウエルナー (H.Werner [1890-1964]) といった当時の学者たちはすべて、実験やテストによる研究方法を補うために不可欠なものとして、日誌的形態の組織的な観察を位置づけていた。つまりヨーロッパでは、日誌的な方法は少なくとも 20 世紀の最初の数十年ほどは非常に高く評価されていたのである。その代表がピアジェ (J.Piaget [1896-1980]) の観察研究である。

ピアジェの日誌的研究

ピアジェが日誌的な乳児研究を始めたのは、日誌的観察を尊重するヨーロッパの研究風土においてであった。ピアジェは生後 2 年間における 3 人の自分の子どもたちの精緻な観察から、『知能の誕生』(1936)、『実在の構成』(1937)、『象徴の形成』(1946) という日誌的観察に基づく研究成果を発表している。この 3 部作は、その後、半世紀近く乳幼児の発達研究の基礎的文獻として発達心理学に多大な影響を与えることになる。ピアジェにとって、日誌的に観察することは発生をとらえるために必要不可欠な方法だったのである。

例えば、ピアジェによれば、乳児における「反射」の発達を“心理学的に”扱うということは、ある特定の乳児の反射行使の仕方の歴史的な展開過程を丹念に追ひ、その反射の機能の仕方を“同化”と“調節”の均衡化として構造的に記述することを意味していたのである。その意味で、ピアジェの考え方は、ゲゼル (Gesell [1880-1961]) などのいわゆる発達診断的な乳児観察とは発想が異なっている。後者では、例えば、ある年齢の乳児にどのような反射が見られ、どのような反射が見られないかということが研究のテーマになる。ところが、ピアジェが問題にしているのは、一般にある年齢にある反射が見られるか否かということではなく、ある特定の子どもが、どのようにして個々の

反射を発達させてきたのかという反射行使の歴史的な変容プロセスなのである。ピアジェによれば、どのような本能的行動（反射）にも学習と発達が存在している。そして、そのような学習と発達のプロセスを規定しているのがその有機体の「知能」なのである。よって、「知能」の構造を捉えるためには、個々の行動の学習と発達のプロセスを丹念に歴史的に追跡する（つまり日誌的に縦断的に観察）ことが必要になる。このような考えに基づいて、ピアジェは、それまでの人間が誰も知らなかったような乳児の発達する姿を描き出すことに成功したのである。

ピアジェの日誌的研究以後、ヨーロッパにおいても発達心理学に影響を与えるような日誌的観察研究は、ほとんど見られなくなってしまった。第二次世界大戦以降、おそらくヨーロッパにおいても行動主義心理学の影響力が大きくなったのだろう。英語圏でピアジェは長い間、無視されてきた。ようやく、ピアジェに目が向けられるようになったのは、1950年代の終わり頃になってからのことである。アメリカにおいてピアジェの心理学に対する功績が完全に認められるようになるまでには、さらにそれから10年ほどかかっている（Evans, R.L., 1973）。しかし、それは必ずしもピアジェの日誌的観察研究が評価されたことを意味しているわけではない。むしろ、ピアジェが日誌的観察によって見出した乳幼児の発達段階説（感覚運動期の6段階説）を実験的に検証しようとする形で、乳幼児に対する実験的研究が盛んになったことを意味していたと言える。アメリカの研究者には、日誌的な研究法はおそらく前世紀の尊敬すべき過去の遺物のように見えていたのに違いない。

日誌的研究の再評価

ワランスら（Wallance et al., 1994）によると、事例的研究・日誌的研究方法の再評価は、思いもかけないところからやってきた。それは、1950年代後半から1960年代初頭にかけての「子どもの言語発達研究」のドラマティックな発展によって生じたのである。つまりチョムスキー（Chomsky）の仕事の衝撃によって、発達の新しい研究領域である心理言語学（psycholinguistics）が誕生するに至り、そこにおいて事例による研究が一つの妥当な研究方法として受け入れられるようになったのである。その原因は、言語と

いうものが生物学的に規定されていると仮定されたことにある。すなわち、単一のケースであっても、言語の獲得プロセスはヒトという種に特有のものと想定されたのである。その結果、ブルーム（Bloom, 1970）やブラウン（Brown, 1973）などの優れた言語発達に関する事例的研究が誕生することになる。その後、言語発達の研究の焦点は、統語論や意味論といった領域から語用論などさらに広範囲な領域へと移行していき、この領域における事例研究の方法は、その後も重要な研究法の一つとして認知され続けていると言えるだろう。このことは、エミリーという女の子の寝室での独り言を大勢の研究者が分析したネルソン（Nelson, 1989）編集の書物からも理解できる。

日本における日誌的研究の始まり

おそらく1970年代のブルーナー（Bruner）を旗頭とする社会的コンテキストや具体性を重視する乳幼児コミュニケーション研究の興隆が、日本にも影響を与えていったのだと思われる。私ややまだようこや綿巻徹や秦野悦子といった、後の日誌研究会のメンバーは、互いにまだ知り合うには至ってなかったが、そのような共通の時代精神の風を受けていたのである。私自身がピアジェ（Piaget, 1945）とギョーム（Guillaume, 1926）の模倣研究を対比検討する中で、子どもの姿をトータルに分析できる「日誌的研究」の再評価を主張したり（麻生, 1980b）、コンテキストを重視し、日常世界での子どもの他者理解を記述的に研究することの必要性を指摘した（1980a）のも、そのような時代精神の影響からであった。後者が掲載された『心理学評論』に、やまだの「言語機能の基礎」という論文が掲載されている。この偶然をきっかけにして、私とやまだは互いに同じ学を志す同志であることに気づいたのである。私たちはともに行動主義や論理実証主義という疑似自然科学主義との「闘い」のさなかにあると自覚していた。行動主義心理学という抑圧の帝国は、1960年代後半から往時の勢いを失いつつあったとは言え、まだ圧倒的力を持っていた。また当時、その一部は、情報処理科学・認知心理学という新しい仮面をかぶって、疑似自然科学主義をさらに推し進めようとしていたのである。日誌的な観察、事例的な観察が、日本の心理学会の中でまともな研究として受け入れられる余地はまだなかったと言ってよい。その中で、私たちは仲間を

見つけたのである。

1983年3月に、やまだの呼びかけで、やまだ・麻生・秦野悦子・綿巻徹の4人をメンバーとした第一回「(乳幼児)日誌研究会」が開かれた。秦野・綿巻は、言語発達の視点から(自分の子どもの発話の)日誌的記録をとっている研究者であり、やまだ・麻生は、認知発達やコミュニケーションの発達を広い視野から把握するために(自分の子どもの様々な行為の)日誌的記録をとっている研究者であった。

やまだは、1982年に『教育心理学研究』に「0～2歳における要求——拒否と自己の発達」という論文を発表している。これは、教育心理学研究に日誌的な事例観察に基づく研究が掲載された、本邦初の論文となった。その後、やまだ(1987)は日誌的な資料を理論的な観点からまとめ、『ことばの前のことば』(新曜社)を出版している。このような日誌的データに基づく発達心理学の本格的な研究書が出版されたのは、我が国では戦前戦後を通じて初めてのことであった。それに鼓舞され、後を追うように私自身も、1990年に新しく創刊された『発達心理学研究』に「口」概念の獲得過程：一乳児の食べさせる行動の研究」という事例に基づく論文を発表し、1992年に長男の日誌的観察に基づく『身ぶりからことばへ：赤ん坊にみる私たちの起源』(新曜社)を出版した。これ以降、事例的な研究方法、日誌的観察に基づく研究方法は、我が国においては、ゆっくりではあるが次第に市民権を得るようになっていたと思われる(鯨岡, 1991; 南博文, 1991)。

日本における質的心理学研究

やまだと私は、何かの縁があったのだろう。2000年に無藤隆の呼びかけで集まった麻生・やまだ・南博文・サトウタツヤの5人組の中に私たち2人が入ることになり、この5人の編集で2002年に『質的心理学研究』が創刊されることになった。この雑誌をきっかけとして、2004年5月には日本質的心理学会が結成され、今日に至っている。学会誌に移行した第4号から第6号までの初代編集長がやまだで、第7号からの2代目編集長が私である。出会いは日誌研究から始まって、なぜか2人して質的心理学にたどり着いたというわけである。

周知のように、やまだの研究は子どもの日誌的な観

察研究というスタート地点から大きく羽ばたき、驚くべき拡がりを見せている(やまだ, 2007)。それに対して私は相変わらず子どもの発達にこだわり(麻生, 2007)、20数年前の日誌的な観察記録をまとめる仕事の途上にまだ留まっている(麻生, 2008)。なぜ、日誌的観察をしていた私とやまだが、それぞれ違った道を歩みつつも、また同じ質的心理学にたどり着いたのだろうか。

その理由は、それぞれの最初の日誌的な観察研究の中に見出すことができるように思われる。それに対して、ピアジェが質的心理学などに関心を寄せるなどということはとうていあり得ないことである。ピアジェにとって科学的な研究が「質的」でもあるのは自明のことであり、わざわざそれを名乗るなどということは悪い冗談に他ならない。ダーウィンやピアジェの「子どもの観察研究」は十二分に質的である。やまだや私の観察研究も同様である。ではなぜ、前者2人(ダーウィン・ピアジェ)と後者2人(やまだ・麻生)との間に「質的な研究」に対するとらえ方の違いが生じるのだろうか。実は、同じ日誌的な観察をベースにする研究とはいえ、両群の間には極めて本質的な相違点があるのである。

ダーウィンやピアジェの観察は、博物学や自然史を大切にする19世紀の自然科学的精神を体現するものであったと言える。それに対して、やまだや私は、研究をし始めたのがポスト・ベトナム戦争の頃という世代である。それは、行動主義という疑似自然科学主義の抑圧がようやく少し弱まり、文化相対主義的な時代精神が芽を吹き出していた時代であった。やまだ(1987)や私(1992)には、ダーウィンやピアジェにはない次のような文化心理学的な視点がある。

- ①「生活世界の把握」：やまだも私もともに、乳児の日常生活をできるだけトータルに捉えることを目標に定めて観察を行っている。
- ②「関係論的観察」：やまだも私も、観察対象と観察者とが相互規定されるという「関係論的な観点」を強調し、参与観察を行っている。両者は、観察者の「感情」や「解釈」をノイズではなく、観察者を規定する本質的な成分として位置づけている。

この2点が、やまだと私を、十数年後に「質的心理学研究」というジャーナルへ導いたと言えるだろう。「日誌的研究の再評価」で述べたように、子どもの言語獲得研究が1970年代に盛んになっていったと

きに、言語研究やコミュニケーション研究では、すでに生活コンテクストが重要であることは関係者に広く認識されていた。その意味では、①の「生活世界の把握」はある意味で順当なところである。しかし、そこには欧米の研究にはない2人だけにみられる特徴がある。それは、生活のトールな理解を希求するいささかロマンティックで強迫的な願望である。そのことは、やまだの「ひとりの子どもの生活を丸ごと抱えこんで」(1987,p.V) や、麻生の「可能な限り目に映り耳に入ったことを記録し続けた」(1992,p.75) といった表現から理解できるだろう。このような全体性への希求は、私たちが学生時代に学んだ心理学、人間を細分化してバラバラにしてしまう客観主義に凝り固まった心理学への反動だったと言えるかもしれない。

①の「生活世界の把握」と②の「関係論的観察」を比べたとき、2人の特徴としてより興味深いのは後者である。この「関係論的観察」は、少なくとも発達心理学の分野では、欧米にはほとんどみられなかった視点である。この視点は、その後、鯨岡(2005)が独特の意味づけで精力的に展開するようになっていく。やまだや私の「関係論的観察」は、鯨岡の主張する「観察」とも微妙に異なっている。それどころか、やまだ(1987)と私(1992)の2人の間でも「観察」のニュアンスはずいぶん異なっている。

やまだはできるだけ「観察する」自分を「観察される」息子の方に近づけて、両者の間に情緒のつながった共有世界を築き、そこから乳児の体験世界をとらえようとしている(p.9)。そこには、母親であることと研究者であることを両立させるところにこそ新しい研究分野があるのだという、やまだの研究に対する嗅覚が働いているように思われる。やまだは「自分が今生きている生活の現場の地底から出発して高みを目指すような学問ができないかと思ったのである」(p.V)と書いている。今生きている生活は、子どもとの生活に限らないだろう、出会いも別離も病もすべて生活である。やまだは、おそらくそのように感じ、研究分野を広げていったのだろう。それが、やまだが「質的心理学研究」にたどり着いていった道筋である。

それに対して、私の歩んだ道は違う。私にとって「関係論的観察」とは、内と外に自分自身が引き裂かれてしまうことであった。父親として息子に自然に関わり、自然に解釈しつつ、それを対象化して記述する。内部の視点から関係を捉えつつ、それを外部から視点

対象化し、記述しようというのである。引き裂かれた存在であった私が強くシンパシーを感じたのがエスノメソドロロジーであり、その創始者のガーフィンケル(H.Garfinkel)であった。山田富秋らの編訳の『エスノメソドロロジー：社会学の解体』(1987)を読んで、私はまだ『身ぶりからことばへ』を執筆していなかったが、書きたいことがすでに先に書かれてしまったような気持ちになった。私の「質的心理学研究」へのレールはその時にすでに引かれていたのである。山田富秋・好井裕明(編)『エスノメソドロロジーの想像力』(1998)の巻末に、1991年以降の現象学的社会学、エスノメソドロロジー、さらには、構築主義に関する国内外の文献がリストアップされている。その中に拙著『身ぶりからことばへ』も記載されている。このように、やまだにしろ私にしろ、子どもの日誌的観察は、ダーウィンやピアジェとずいぶん違った意味で、「質的な研究」に深く根を下ろしていたと言えるだろう。言い換えれば、私たちは「文化」と対面していたのである。

《引用文献(簡略版)》

- 麻生武。(1980a) 子供の他者理解：新しい視点から 心理学評論 . 23, 2, 135-162.
- 麻生武。(1990b) “口” 概念の獲得過程 発達心理学研究 . 1, 1, 20-29.
- 麻生武。(1992) 身ぶりからことばへ：赤ちゃんにみる私たちの起源 新曜社.
- 麻生武。(2007) 発達と教育の心理学 培風館.
- 麻生武(2008) 生後2年目公園の仲間との出会いー25年前の日誌的記録からー. 無藤隆・麻生武(編) 育ちと学びの生成(質的心理学講座 第1巻) pp.79-104. 東大出版.
- Darwin,C. (1877) A biological sketch of an infant. Mind, 2, 285-294. (黒田実郎訳。(1966) ウェイン・デニス編. 胎児・乳児の行動の発達 岩崎学術出版)
- 鯨岡峻。(2005) エピソード記述入門. 東京大学出版.
- 南博文(1991) 事例研究における厳密性と妥当性：鯨岡論文(1991)を受けて 発達心理学研究 . 2, 1, 46-47.
- Piaget,J. (1936) La naissance de l'intelligence chez l'enfant. Delachaux & Niestle' (谷村覚・浜田寿美男訳。(1978) 知能の誕生 ミネルヴァ書房).
- Wallance,D.B, Franklin,M.B. & Keegan,R.T. (1994) The observing eye : a century of baby diaries. Human Development, 37, 1-29.
- やまだようこ (1982) 0～2歳における要求-拒否と自己の発達. 教育心理学研究 . 30, 38-48.
- やまだようこ (1987) .ことばの前のことば 新曜社.
- やまだようこ (2007) 喪失の語り (著作集第8巻) 新曜社.
- 山田富秋・好井裕明・山崎敬一(編訳)。(1987) .エスノメソドロロジー：社会学的思考の解体. せりか書房.
- 山田富秋・桜井裕明。(1998) .エスノメソドロロジーの想像力 せりか書房.